セコンド・キャリア

人物

染野（そめの）　羽沙美（はざみ）	(30)	伝伝電機・カスタマーサポート部課長
虎辻（とらつじ）　トウガ	(25)	元カリスマボクサー
須間瀬（すませ）	(23)	カスタマーサポート部・社員
丸野（まるの）	(28)	同
四綿（よわた）	(35)	同
真白（ましろ）　望（のぞみ）	(27)	伝伝電機・社員
雲ケ呉（くもがくれ）　猿彦（さるひこ）	(53)	カスタマーサポート部・部長
久土井（くどい）　以蔵（いぞう）	(75)	伝伝電機・顧客
星野（ほしの）　祥子（しょうこ）	(35)	伝伝電機・顧客
整ノ江（ととのえ）　理（おさむ）	(32)	伝伝電機・顧客
宇佐林（うさばやし）　武（たけし）	(52)	伝伝電機・常務
泊（とまり）　元（はじめ）	(52)	泊ボクシングジム・会長

○ドキュメンタリー番組・試合風景

N「続いては、孤高のカリスマ虎辻トウガ」

虎辻（とらつじ）トウガ（25）のＫＯシーン。

N「リングの外でも、ファンを盛り上げた」

○同・記者会見場

トウガ、相手選手を一瞥。

トウガ「ベッド置いといてくれ」

一同「？」

トウガ「ゴング鳴るまで寝てるわ。寝起きでも勝てるからよ。で、試合が終わったら、今度は（相手に）お前が寝る番だぜ」

記者「自信がある、ということですね？」

トウガ「おいおい、俺を誰だと思ってんだ」

トウガ、カメラにニヤリ。

トウガ「俺様だぜ」

N「そんな彼も……届かなかった」

○同・リング内

パンチをもらい、ふらふらのトウガ。

と、タオルが飛んでくる。
セコンドの**泊元**（とまりはじめ）**（52）**が投げたのだ。
響き渡るゴング。
動画Ｎ「以来、彼は姿を消した。あまりにもあっけない引退だった」
画面が切り替わる。

○伝伝電機のＴＶ・ＣＭ
ＣＭ「暮らしイキイキ！　心ウキウキ！　デンデン電機〜♪　夏の大感謝祭・開催中！」

○伝伝電機サポートセンター・バックヤード
ＣＭが流れているＴＶ。を、リモコンで操作する**染野羽沙美**（そめのはざみ）**（30）**。
壁には、製品ポスター。
須間瀬（すませ）**（23）**の声「（隣の部屋から）申し訳ございません。今、上のものを」
羽沙美、声には反応せず、手元の書類に『リモコン電池切れ』と書き終え、書類の山から新たに一枚を取る。

と、須間瀬が現れ、
須間瀬「（すまなそうに）染野課長……」
羽沙美「（察して）オッケー」

○同・対応窓口全景

カウンターの内側で**丸野**（まるの）**(28)**ら、社員達が応対をしているが、
客Ａの声「使えねぇな、製品もあんたも！」
客Ｂの声「あんた達が作った商品だろ？！」
等と、客の怒号が飛び交う。

○同・とある窓口

苛立つ客Ｃ、の元へ現れる羽沙美。
羽沙美「お待たせして申し訳ありません。サポートセンター責任者の染野と申します」
客Ｃ「（怪訝）……」
羽沙美「（笑顔）」
×　×　×
羽沙美「申し訳ございません」
ただただ、頭を下げる羽沙美。

客C「どうしてくれるんだよ！？」
羽沙美「申し訳ございません」
客C「折角録画したのに！」
羽沙美「申し訳ございません」
客C「二度と来るか！（出ていく）」
　須間瀬、羽沙美の元へ。
須間瀬「ありがとうございます」
　羽沙美、ケロッとした様子。
四綿（よわた）**(35)**「課長、こちらも……」
　と、今度は四綿が声をかける。
　窓口へ向かう羽沙美。
須間瀬「（四綿に）課長、ありがたいですね」
四綿「んー……（羽沙美の方を見る）」

○同・あちこちの窓口

　羽沙美、別の窓口でまた謝る。
　別の客にも。また別の客にも。
客D「申し訳ありませんはいいけどよ、なんとかならないの？」
羽沙美「仕様でございまして」

客D「（悲しげに）そっか……」

○同・別の窓口

羽沙美を見つめる須間瀬・四綿。

四綿「代わりに謝ってくれるけど、それだけなんだよな」

○同・また別の窓口

頭を下げる羽沙美の向かいに、**久土井**（くどい）**以蔵**（いぞう）**(75)**。ドライヤーを手に激高。

四綿の声「自分が開発した商品のクレームだから、文句も言えないって噂もあるしな」

須間瀬の声「課長って、ここの前は、商品開発だったんですよね？」

四綿の声「そ。花形から異動だから、やる気ない可能性もあるな」

須間瀬の声「そんな風には見えないですけど」

四綿の声「もしくは―」

羽沙美、立ち去る久土井を見送る。

四綿の声「―感情がないか」

カウンターの下の羽沙美の右手。
握ったこぶしが震えている。

○同・バックヤード

戻ってくる羽沙美。
席に戻り、書類の山に向かう。
作業を再開しようとするが、書類の山を落としてしまう。

羽沙美「……」

一枚一枚書類を拾う羽沙美。

○伝伝電機サポートセンター・外観（日替り）

小さな古いビルの1階のテナント。
『伝伝電機サポートセンター』。

雲ヶ呉の声「減らないですねぇ―」

○同・バックヤード

羽沙美と、**雲ヶ呉猿彦**（くもがくれさるひこ）**（53）**。

雲ヶ呉「―クレーム数」

羽沙美「（悪びれず）これが精一杯で」

雲ヶ呉「対応ノルマ月５０件。全然達成出来
てないですよ？」
羽沙美「一生懸命謝ります」
雲ヶ呉「それも大事ですけど」
羽沙美「あ、部長が、宇佐林常務に怒られな
いようにしないとですね」
雲ヶ呉「（苦笑）それもありますけどねぇ」
と、ケータイが鳴り、席を立つ雲ヶ呉。
羽沙美「……」
入れ替わりで、丸野。
丸野「課長、この機種なんですが」
羽沙美「何？」
丸野「一発で予約画面に変わらないんです」
と、手のひらサイズでボタンの少ない
S200のリモコンを見せる。
羽沙美「あーS200ね。これ、変わらないのよ」
羽沙美、リモコンをＴＶに向ける。
８回もボタンを押して漸く予約画面に。
丸野「そんなぁ……」
ニッコリ笑う羽沙美。

羽沙美「そういう仕様なの―」
隣から、客の怒号が聞こえてくる。

○同・対応窓口
詫びるばかりの社員達。
羽沙美の声「―仕方ないのよ」

○伝伝電機サポートセンター・外観（日替り）
久土井の声「メーカー失格だよ！」

○同・対応窓口の一角
久土井「昔はもっとちゃんとさぁ―」
等と、しゃべり続ける久土井。
その頭……ヅラがずれかけている。
詫びるばかりの羽沙美。
ふと、隣の客（トウガ）が視界に入る。
ヒゲ面。フードで顔がよく見えない。
トウガ「殴ったら壊れちまってよぉ」
対応する須間瀬の困惑顔。
須間瀬「……殴った？」

トウガ「俺のことやってるから、ムカついて」
須間瀬「俺のこと、というのは？」
トウガ「（答えず）壊れないＴＶない？」
羽沙美、トウガの調子に、思わず顔が
ほころぶ。
久土井「今笑ったな！　わざわざ足を運んで
商品を良くしてやろうとしてるのに！」
羽沙美「いえ、そんな……申し訳ありません」
久土井「みっともない顔で笑いやがって！
もういいから、最新のヤツと交換しろ！」
ドライヤーを激しく叩きつける久土井。
怯える社員。
羽沙美の握りこぶしが震える。
羽沙美「……ドライヤーは毛生え薬じゃ―」
トウガ「―さっきからさぁ―」
突然、トウガが久土井に話しかける。
トウガ「―ドライヤーのこと言ってっけど―」
羽沙美「！？」
トウガ「―あんたの頭に必要あるか？」
久土井「な、なんだと？！」

慌てて髪を触る久土井。
久土井「何だお前は？　お客様に向かって、何様のつもりだ？！」
トウガ「何様？　俺を誰だと思ってんだ」
と、フードを取り、
トウガ「俺様に決まってんだろ」
羽沙美「（トウガに気づき驚く）」
久土井「そんなヒゲヅラ知らんわ！」
トウガ「ヅラ？　ヅラはお前だろ」
久土井「誰がだ！」
トウガ「ドライヤーはな、毛生え薬じゃないんだぜ！」
羽沙美「え？」
久土井「うるさい！　風が弱いのは本当だ！」
と、ドライヤーを起動する久土井。
久土井「ほらみろ！」
と、突然風が強くなり、久土井のカツラが吹き飛ぶ。
トウガが、ターボボタンを押したのだ。
トウガ「なんだ。いい風じゃねぇか」

羽沙美「『弱』で使ってた？」
久土井を軽やかにかわし、カツラに風を当て続けるトウガ。
空を舞うカツラ。
久土井、必死にカツラを掴む。
トウガ「で。何が動きやしないんだっけ？」
久土井「……動くならいいんだ、動くなら」
トウガ「でさ、（頭を指して）やーっぱりハゲてんじゃねぇか！　この野郎白々しい」
久土井「だ、断じてこれはハゲじゃない！」
トウガ「ハゲだって別にいいんだよ。なんだその諦めの悪い頭！」
カツラの取れた久土井の頭、残った毛をうすーく全体になじませている。
久土井「お前みたいなチャラチャラした髪の奴に何がわかる！」
トウガ「オレぁどんな髪型も似合うんだよ！」
久土井「だったらきちっと七三分けにしろ！」
トウガ「なんでだよ、サラリーマンかよ！」
久土井「あんたここの店員だろ！？」

トウガ「あ？　なんの話だ！？」
久土井、皆の視線に気づき、
久土井「もういい！（と、帰る）」
トウガ「スキンヘッドの方が似合うぜ！」
と、トウガ、羽沙美にリモコンを渡す。
ボタンの少ない、S200のリモコンだ。
トウガ「（羽沙美に）修理ヨロシク」
羽沙美「え？」
去っていくトウガ。
須間瀬「（羽沙美に）何だったんですかね？」
羽沙美「……」
羽沙美、慌てて隣の部屋へ。

○同・バックヤード

ＴＶで流れているドキュメンタリー。
そこには、虎辻トウガの姿。
驚く羽沙美。
が、笑みを浮かべる。
×　×　×
フラッシュ・羽沙美の回想。

トウガ「毛生え薬じゃないんだぜ！」

×　　×　　×

羽沙美「私も……私も、同じこと思ってた」

と、手元のドライヤーを見つめる。

もう一度、画面のトウガを見て、

羽沙美「……ヒゲ似合わねぇ」

○伝伝電機サポートセンター・外観（日替り）

途切れず出入りする客。

○同・対応窓口

対応に追われる社員達。

四綿が対応する客、ヒートアップ。

四綿、羽沙美に視線を送るが、

社員Ａ「課長、先日のドライヤーの方から」

羽沙美「！」

踵を返して、電話に出る羽沙美。

四綿「うそーん（と、泣く泣く客の対応）」

○同・窓口の隅

羽沙美「（電話）染野でございます」
久土井の声「おう、責任者さんか。この前の
ヒゲヅラの名前、わかんなくて」
羽沙美「申し訳ありませんでした。彼は―」
久土井の声「―悪かったなって伝えてくれよ」
羽沙美「え？」
久土井の声「気持ちいいもんだな。あんなハ
ッキリ言われるとよ」
羽沙美「あの―」
久土井の声「―忙しいところ悪いな、じゃ！」
切れた電話を見つめる羽沙美。

○同・バックヤード

―に、呆然と入ってくる羽沙美、呆然。
と、電話中の丸野が、
丸野「そこは開発部の方でお願いを……いや、
その……こちらで対応します（切る）」
丸野の視線の先に、トウガのＴＶ。
羽沙美「あ、ヒゲの」
丸野「（気づいて）実は、手配漏れで……」

突如、梱包をはじめる丸野。
丸野「もう、俺、直接持っていきます！」
羽沙美、S200のリモコンを手に取る。
何気なく触ると、隠しボタンがあった。
羽沙美「あ……」
ＴＶに向ける羽沙美。
一発で予約画面に切り替わった！
羽沙美「……変えれるんだ」
小さな笑み。
羽沙美、ＴＶを台車に乗せる。
丸野「課長？」
羽沙美「しばらくここお願いね！」

○パチンコ屋・店内

トウガ、自身がモデルになった『ＣＲぱちんこトウガ』を打っている。
液晶内のトウガ、ＫＯ負け。
トウガ「ンだよ……」
隣の台のオヤジ「ダメだね兄ちゃん（笑）」
トウガ「（フンッ）」

○トウガのマンション・外観

ピンポーンとインターホンの音。

○同・エントランス〜前

ＴＶを台車に載せ、訪ねてきた羽沙美。

羽沙美「（誰も出ず）なんだ……」

○同・前の道

トウガ、歩いている。すると――、

借金取りＡ「虎辻トウガさんですね？」

借金取りが三人がトウガを囲む。

トウガ「……ファン？」

借金取りＡ「お支払いを（と催促状を渡す）」

トウガ「こんなに？」

借金取り三人「（頷く）」

トウガ「あー……」

ちょうど、台車を押した羽沙美が。

羽沙美「あ（どうも）」

トウガ、台車のＴＶに駆け寄り、

トウガ「うんちょっとね～、今これがアレで
もう大変で、マジヤバくて全ッ然それどこ
ろじゃないワケよ――（羽沙美に）ねっ？」
羽沙美「え？」

○とある道

必死に逃げているトウガと羽沙美。
後ろから追いかける借金取り三人。
羽沙美「なんで！？　なんで私も！？」
羽沙美、台車を押しながら走っている。
トウガに遅れを取り始める。
トウガ「クソッ、乗れ！（と、台車を奪う）」
羽沙美「え！？」
と、羽沙美を台車に無理やり乗せる。
羽沙美「え！？　え！？」
トウガ「ご乗車ありがとうございま～す」
羽沙美「（絶叫）ギャーッ！！！」
と、全速力で走り抜ける。
×　×　×
人混みの中を疾走する二人。

羽沙美「右！　右！」
そば屋の出前とぶつかりそうに。
羽沙美「左！　左ななめ４５！」
トウガ、右・左と器用によけていく。
ソフトクリームを食べている女子高生。
羽沙美「前前前前前前前！」
羽沙美の眼前でソフトクリームが横切る。少しソフトクリームが口に入る。
トウガ「うまいか？」
借金取り達、そば屋の出前にぶつかる。
トウガ「バカめ（笑）」

○総合体育館・前の道～入口

疾走する二人。と――、
トウガ「（辺りを見回し）……あれ？」
羽沙美「ほら足止まってるよ！」
前方には、同じ方向へ歩く人達。
羽沙美「この人達に紛れるよ！」
トウガ「お、おう……」
と、通行人の人混みに紛れる。

トウガ「ここって……」
視線の先は総合体育館。
羽沙美「あそこあそこ！　あそこ入るよ！」
と、指差した先は搬入口。
荷物を運搬するスタッフや台車。
トウガ・羽沙美「おつかれさまです～」
と、スタッフ達に混じる。
借金取り達、気づかず通り過ぎる。
羽沙美「（ホッ）ハァ――」
そして、
羽沙美「（カッ）何してくれてんのよッ！！」
と振り返るが、そこにトウガはいない。
トウガ、体育館の方に歩いている。
羽沙美「ねぇッ！」
トウガ「うるせぇ」
羽沙美「はぁ！？」
トウガ「……（目を閉じ、耳をすます）」
かすかに、バチンバチンとぶつかる音
や歓声が、体育館の中から聞こえる。
トウガ、中へ。

羽沙美「ちょっと！」

○同・廊下〜試合会場

廊下を歩くトウガと羽沙美。

羽沙美「ＴＶ！　ＴＶどうするんですか！？」

トウガ「（無視。ずんずん進む）」

トウガ、奥の扉を開ける。

羽沙美「割れたＴＶの修理――」

――割れんばかりの大歓声。

扉の先はボクシングの試合会場。

リング上で選手達が打ち合っている。

選手の息遣い、ステップ、パンチが肌に食い込む音。呼応するように歓声が。

羽沙美「……（じっと見ている）」

パンチを激しく繰り出していく選手達。

その度、羽沙美は拳をギュッと握る。

すると、その拳がだんだんと上へ。

そして――、

羽沙美「いけえぇーッ！！！」

と、拳を振り上げる。

羽沙美「そこッ、ほらパンチ！　いけ！」
一方の選手、パンチしようとするが、
逆にパンチを喰らう。
羽沙美「……負けるなァッ！」
選手、パンチを喰らわす。
羽沙美「よし！」
トウガ、フッと笑い、
トウガ「……やっぱいいねぇ」
×　×　×
ラウンド終了のゴング。
トウガ「どうよ？」
羽沙美「もーヤバいです！」
トウガ「だろぉ？　ヤベェんだよ、やってる
時はもっとヤベェんだよ、スカッとして！」
羽沙美、リングの一角を指差し、
羽沙美「あれはなんですか？」
トウガ「ん？」
見ると、セコンドが選手にドリンクを
与えたり、耳元で指示をしている。
トウガ「あ、セコンド（のこと）？」

羽沙美「セコンド？？」
トウガ「ああやって選手に指示したりすんの。
相手の腹狙えとか、足止まってんぞとか」
羽沙美「へぇ～、選手の本能だけでやってる
のかと思ってました」
トウガ「――それじゃ勝てねぇな」
羽沙美「……？」
トウガ「選手とセコンドはニコイチなわけ。
それでやっと勝てんだよ」
羽沙美「ニコイチ……」
と、セコンドを見る。
×　×　×
ラウンド開始のゴング。
再び激しく打ち合う選手達。
羽沙美「（ふとトウガを見る）……」
トウガ、小さくステップを踏んでいる。
セコンド「もっと足動かしてけ！」
ステップが大きく。
羽沙美「（トウガを見ている）……」
と――、

羽沙美「……あの」
トウガ「ん？」
羽沙美「選手、復帰しませんか？」
トウガ「（足が止まり）は？」
羽沙美「選手としてウチで働きませんか？」
トウガ「バカなの？」
羽沙美「バカ言ってます。でも本気です」
トウガ「はいはい、バカでも本気でもいいいから、試合観ようぜ、今おもしれえとこ――」
羽沙美「――私も勝ちたいんです！」
トウガ「ええ？」
羽沙美、拳を握り、
羽沙美「文句しか言わないヤツとかに！」
選手のパンチがヒット。
羽沙美「勝ち方は分かるんです、頭の中では。でも……自分ではできないんです！」
羽沙美、リングを見て、
羽沙美「リングに上がれないんです。上がるとなんかダメで。で、代わりにあなたが」
トウガ「俺様が？」

羽沙美「その自慢の！」
トウガ「自慢の？」
羽沙美「口で！」
トウガ「腕だろ！」
羽沙美「今度は口で。知ってます？　あなた、
　腕も立つけど口も立つ！」
トウガ「ふざけんな！」
羽沙美「勝つには選手とセコンド、ニコイチ
　なんですよね？　だったら私がセコンドに
　なって、あなたの力を引き出します！」
トウガ「引き出してくれるな――」
羽沙美「ＫＯさせに来てくれませんか？」
トウガ「おいおい……」
　トウガ、リングを見る。
　必死に打ち合う選手達。満身創痍だが、
　それでもパンチを繰り出す二人。
羽沙美「会社で暴れ回ってほしいの。（ハッ）
　これはきっと、虎辻トウガの復帰戦！」
トウガ「復帰戦……」
　と――、

選手がＫＯを決め、試合終了のゴング。
ＫＯを決めた選手、喜びを爆発。
嬉しそうに拳を上にかかげる。
そしてセコンドと抱き合う。
トウガ「（リングを見ている）」
羽沙美「拳で勝つのも良いけど、今度は口で勝ってみない？　……どう！？」
トウガ「……口でも負けるわけねぇだろうが」
羽沙美、ニヤリ。
二人、握手。そして颯爽と歩き出す。
客席からの大歓声が会場を包む。

○伝伝電機サポートセンター・バックヤード
（日替わり）
部員達、口をアングリ。
羽沙美、部員達に説明している。
羽沙美「……というわけで、虎辻トウガさんが皆さんの仲間となりました。」
トウガ「（部員達を見回し）なんだよ……、しょぼくれた奴ばっかだな。俺、トウガ。

知ってんだろ？　俺このカニタマ・サポートの中では一番新人だけど、オレが一番えれーから。間違えんなよ、はいよろしくー」

部員達、唖然。

羽沙美、トウガを見て、強くうなずく。

×　×　×

羽沙美、トウガを見て、唖然。

トウガ、机に脚を乗せ電話。

トウガ「ちゃんと修理するって、ほんじゃ！」

電話を切るトウガ。

トウガ「どうだ？　バッチリだろ？」

羽沙美、拳を震わせる。

○同・外観

羽沙美の声「どこがですか！」

○同・バックヤード

社員達、羽沙美とトウガをチラ見。

羽沙美「まず敬語を使って下さい。それと、最初に社名。あとは、話をよく聞く」

トウガ「俺がそんなの覚えられると思うか？」
羽沙美「居直り！？　誰が貴方の借金払った
と思ってんの？」
トウガ「そもそも何の為に俺を呼んだんだ？」
羽沙美「それは……」
と、慌てて駆け寄る須間瀬。
須間瀬「『交換の女王』がきました！」
羽沙美「ウソでしょ！？」
羽沙美、リモコンを落としかける。
トウガ「（嬉しそう）誰？　その強そうな奴」
羽沙美「（須間瀬に）すぐ行く。（トウガに）
これ、読んでおいて！」
『猿でもわかるマナー』。
トウガ「……猿って」
×　×　×
本を……顔に置いて爆睡するトウガ。
星野祥子（ほしのしょうこ）（35）の声「だから不良品よ！」
トウガ「（驚いて起きる）」

○同・対応窓口

――を、のぞき込むトウガ。
星野に頭を下げる羽沙美。
羽沙美「申し訳ございません」
星野「交換しなさいって言ってるでしょ！」
と、小型の電子ピアノを指す星野。
羽沙美、チラッと手元のＰＣを見る。
過去の対応履歴が表示されている。
羽沙美「……（意を決して）商品に問題は―」
星野「―責任転嫁！　責任転嫁ね！　責任転嫁なんでしょ！？」
星野の勢いに、羽沙美タジタジ。
トウガ「（嬉しそうに）俺も混ぜろよ」
羽沙美「！？」
トウガ「何の為に俺を呼んだんだ？」
羽沙美「だからそれは……」
トウガ、リングロープをまたぐように、ひょいっとカウンターを乗り越える。

○同・カウンターの内側

トウガ、試合のように星野に対面。

星野「……なによあなた？」
トウガ「（ニヤリ）」

○同・カウンターの外側

不安げな羽沙美。

○同・カウンターの内側／外側

トウガ、咳ばらいを一つ。
トウガ「えぇ……おこの度は、おご迷惑をおかけして、お誠に申し訳たてまつりお伺い申し上げたてまつり……たてまつります」
羽沙美「何じゃそりゃ！」
トウガ「（羽沙美に）練習の成果だ！」
羽沙美「どこがよ！」
星野「私を馬鹿にしてるんでしょ！」
と、カウンターを叩く星野。
トウガ「……ホントに馬鹿ならしょうがねぇだろ」
羽沙美「（焦り）言い過ぎよ虎辻さん！」
星野「（聞き取れない程激高）」

星野、小型ピアノを持ち上げる。
トウガ「（驚き）おいおい……」
羽沙美「！」
カウンターを乗り越える羽沙美。
トウガ「（焦り）それは止めとけ、止めとけ」
が、星野、小型ピアノを投げつけた！
避けるトウガ。
と、止めようとした羽沙美が飛び込む。
ピアノが羽沙美の方へ。
×　×　×
フラッシュ。トウガの回想。
リングで、泊を殴ってしまうトウガ。
×　×　×
泊と羽沙美の姿が重なって見える。
トウガ「！」
間一髪、羽沙美をよけさせるトウガ。
ピアノが壁にぶつかる。社員の悲鳴。
羽沙美「（怯える）」
トウガ「……」
星野「早く交換なさい！」

トウガ「てめぇ！」
星野に掴みかかろうとするトウガ。
羽沙美「（止める）ダメ！」
トウガ「……（羽沙美を連れ出す）」
羽沙美「え？」
星野「どこ行くのよ！」
トウガ「インターバルだよ！」
と、近くにいた四綿を引っ張り出す。
トウガ「（星野に）代わりに置いとくから」
四綿「ウソ……」

○同・バックヤード

羽沙美とトウガ。
羽沙美「さっきは……ありがとう」
トウガ「出しゃばるな」
羽沙美「は？」
トウガ「あんたはセコンド、選手は俺だ」
羽沙美「……そうね」
床に落ちたマナー本を見て、
羽沙美「まともに敬語も話せないけど」

トウガ「（苦笑）ほっとけ」
羽沙美「（自分に言い聞かせる）指示を出す」
トウガ「おぅ」
羽沙美、ＰＣの応対履歴を見せる。
『コンポウモレ』の記載。

○同・窓口全景

羽沙美とトウガ入ってくる。
応対中の須間瀬が目に入る。
電子レンジのクレームらしい。
そのレンジをバン！と叩くトウガ。
電子レンジの液晶に、『０１』。
レンジがチーンと鳴る。まるでゴング。
須間瀬・客「直った？」
トウガ、カウンターを乗り越える。
まるでリングイン。

○同・星野の窓口・カウンターの内側

星野「やっと戻って来たわね！」
憔悴した四綿を余所に、トウガに詰め

寄る星野。
が、トウガ、無視。
突如、ピアノで『運命』を弾く。
トウガ「（ピアノ）ソソソミー」
星野「？」
トウガ「（ピアノ）ファファファシー」
音が外れる。ずっこける一同。
星野「なんなのよ！」
トウガ「おーよかった、ちゃんと出るな」
鍵盤を押していくトウガ。
トウガ「てかさ、どこが壊れてるんだ？」
星野「はぁ！？　全部よ！　全部！」
トウガ「どこよ？」
星野「とにかく全部なのよ！　もうダメなんだから交換なさい！」
トウガ「交換か……してやるよ」
星野「そうなさい」
トウガ「本当に壊れたらな」
星野「はぁ！？」
トウガ「安心しろ……保証書はあるんだから」

星野「！」

○同・カウンターの外側

トウガの発言に、うなずく羽沙美。

ＰＣには、３年前の応対履歴。

羽沙美「３年前、保証書の梱包漏れがあって、気付かなかったスタッフが交換を拒否してしまった」

丸野「そんなことが……」

○同・カウンターの内側／外側

トウガ「それに腹が立って、毎回毎回交換を迫ってんだな。何も壊れてなくても、だ」

星野「だって保証書がないじゃない！？　ないのよ！　結局交換しないのよ！」

と、ピアノの箱を見せつける星野。

たしかに保証書はついていない。

トウガ「読み通りだ。ジャブにフックをかぶせてきやがったな（羽沙美を見る）」

羽沙美「（悲し気にうなずく）」

トウガ「それをやっちゃ、おしまいだぜ」
星野「！」
トウガ、箱の写真を見せつける。
箱には、ちゃんと保証書が付いている。
羽沙美「３年前のことがあって以来、必ず保証書を確認して、写真に収めてるんです」
星野「……」
トウガ「この写真にはちゃんと保証書がある。今はない。なーんでだ？」
星野「捏造よ！　捏造だわ！」
羽沙美「（語気強く）虎辻！　裏の左よ！」
トウガ、箱を調べると、剥がし残ったフィルムと糊。
トウガ「ドンピシャ」
星野「！」
トウガ「保証書捨てて、壊れてねぇものを交換しろなんて、反則もいいとこだな！」
星野「……」
トウガ「まぁ俺は、ラフファイトも大好物だけどな」

と、腕を回すトウガ。
羽沙美「ちょっと！（慌ててトウガの元へ）」

○同・カウンターの内側

トウガと星野の間に入る羽沙美。
羽沙美「お客様、３年前の件は本当に申し訳ありませんでした。ですが交換は―」
トウガ、羽沙美を追いやり、
トウガ「―つーか壊れる時は壊れるんだよ。保証だのなんだのビビってんじゃねぇ！」
羽沙美「ちょっと！」
星野「うわーーーーー」
と、突如ドバドバと泣き出す星野。
羽沙美「えぇー！」
星野「怖……かったのよ……折角買ったのにダメに……なるのから」
トウガ「モノを投げた時点で、その気持ちはウソになってんだ。ケガしていいのはボクサーだけなんだよ馬鹿野郎！」
星野「！（泣き止む）」

トウガ「本当に壊れたら、そん時ゃ、いつでも来やがれ」
星野「（うなずく）」
星野、ピアノを置いて走り去る。
羽沙美「え？　置いてくの？」
トウガ「メンテしてから、持ってってやったらいいんじゃねぇか？」
羽沙美「良いことといいますね」
と、笑顔を見せる羽沙美。

○同・バックヤード

不満顔を見せる羽沙美。
トウガ「いやー、楽しかった」
机に脚を乗せているトウガ。
羽沙美「……何の為に俺を呼んだんだって、言いましたよね？」
トウガ「おぅ」
羽沙美、リモコンでＴＶを点ける。
羽沙美「変えるためです。お客様を。私達も」
トウガ「そうだったな」

羽沙美「（イラッ）その為にも、マナー覚えて下さい！　このお猿野郎！」
と、トウガの足を机から落とす。
トウガ「うぃ」
羽沙美「（そこは）かしこまりましたッ！」

○同・バックヤードの隅

二人の様子を見ている四綿と須間瀬。
須間瀬「凄いですね虎辻さん」
四綿「それより課長でしょ。なんか……吹っ切れた？」
須間瀬「ボクは、今の課長の方が好きかも」

○同・バックヤード

参考書を読んだとたんに寝るトウガ。
羽沙美「寝るなー！」
壁には製品のポスター。
その横には、『やる気なきものは去れ』と書かれた、やたらめったら豪華な額。

○同・対応窓口（日替わり）

トウガ、接客中。

男性客「じゃ、無償でやってくれんのね？」

トウガ「……は？」

男性客「え、そうでしょ？」

トウガ「そうじゃねぇよ。お前が壊して修理すんだから金とるに決まってんだろうが！お前のワガママなんてかしこまりませーん」

男性客「ア、アンタさぁ――！」

トウガ「またのお越しをお待ちしてませーん」

と、伝票を破り捨てる。

男性客「……クソが！」

と、帰っていく。

社員達、そんなトウガを見て、

須間瀬「なんか勉強になるような……」

四綿「ならないような……」

○同・廊下

男性客「なんだアイツは……！」

すると向こうから**整ノ江理**（ととのえおさむ）（32）。

手にはなぜか取扱説明書。付箋も沢山。
整ノ江「（読みながら）洗濯物６キログラムに対して柔軟剤２０ミリリットルだと……」
と、男性客とすれ違う。
男性客「（ポカン）なんだぁ？」

○同・対応窓口

羽沙美、バックヤードから出てくる。
羽沙美「敬語は順調ですか？」
トウガ「完璧。マスターしたわ」
羽沙美、入口を見て、
羽沙美「あ……」
トウガ「ん？　（と、振り向く）」
整ノ江が入口に立っている。
トウガ「アイツも困ったちゃんか？」
羽沙美「困ったちゃんもなにも……トリセツに愛された、『トリセツの申し子』よ」
整ノ江、説明書をペラペラめくる。
中は書き込みがびっしり。
トウガ「なんだ、ただのガリ勉野郎か（笑）」

整ノ江、トウガ達の方へ。
羽沙美「（笑顔を作って）いらっしゃいませ」
整ノ江「洗濯機について聞きたいのですが」
トウガ「うぃ！　かしこまり～――」
と、接客しようとするトウガ。が――、
羽沙美「（制し）トウガさん……！」
トウガ「なんだよ」
羽沙美「彼、あまり甘く見ない方が……」
トウガ「はあ？　ガリ勉に負けたら選手生命終わるっての。一発ＫＯさせたるよ！」
と、羽沙美をはねのけ、
トウガ「（整ノ江に）どうもぉ～！　今日はこのトウガ様が担当すっからヨロシク！」
もうなんでも聞いてくれ！」
整ノ江「（鼻で笑い）では、お言葉に甘えて」
羽沙美「（心配そうに見守っている）」
羽沙美、型番をメモ。『Ｄ６―０２』。
『０２』をグルッと丸で囲む。
整ノ江「よろしいですか？」
トウガ「おうッ！」

羽沙美、傍に置かれている星野の電子ピアノで、「カーン」と鳴らす。
整ノ江「まず５ページ。ここの『排水ホース掛けは側面と裏面の２つ』とありますが、それぞれに仕様の違いはありますか？」
トウガ「……（ポカン）ん？」
整ノ江「続いて１７ページ。『粘性の高い洗剤は不可』と記載されてますが、具体的な粘性の上限値は何センチポアズでしょう？」
トウガ「……ベンチプレス？」
整ノ江「センチポアズです」
トウガ「分かってるよ（笑）バカにすんなよ」
整ノ江「……では３３ページの毛布コースはシングル重量５キロですがダブルでは？」
トウガ「ん、ん、ん？　階級の話？」
整ノ江「……重量です。じゃあこの自動おそうじ機能を使うと手入れは？」
トウガ「手癖、女の手癖は良いとは言えねぇ」
羽沙美「（唖然）」
整ノ江、説明書を閉じる。

トウガ「なんだよ（笑）、もういいのか？」
整ノ江「……チェンジ」
トウガ「へ？」
整ノ江「あなたじゃ話にならない。チェンジ」
トウガ「ボクシングにチェンジはねぇぞ」
整ノ江「馬鹿ですか（笑）。チェンジ」
トウガ「（イラッ）テメェ――！」
羽沙美「（制し）トウガさん！」
と、バックヤードへ引っ張っていく。

○同・バックヤード／対応窓口

羽沙美、トウガに詰め寄り、壁ドン。
羽沙美「ＫＯ寸前だったじゃないですかッ！」
トウガ「アイツが馬鹿馬鹿うるせぇからよ！」
羽沙美「彼に知識では勝てないんですって！」
×　×　×
熱心に説明書を呼んでいる整ノ江。
羽沙美の声「あの人、トリセツ読みすぎて、
社員より詳しいくらいなんですから」
整ノ江、また一枚付箋を貼る。

×　　×　　×

トウガ「じゃあどうすんだよ？！」

羽沙美「（不良品回収箱を弄り）これです！」

と、取り出したのは――。

〇同・対応窓口

――マイク。

トウガ、マイクを持って戻ってくる。

整ノ江「……？」

トウガ「待たせたな」

整ノ江「お客様を待たせすぎですよ」

トウガ「（フンッ）じゃ、始めようぜ」

羽沙美、星野の電子ピアノで、

羽沙美「さぁここから……」

と、「カーン」と鳴らす。

整ノ江「……では４２ページ。このダニ対策コースですが、これは乾燥コースでも使用できるんでしょうか？　それとも洗濯――」

トウガ「――待てよ」

整ノ江「……？」

トウガ「ソイツのことじゃなくて――」
と、一枚の紙を差し出す。
『トウガ取扱説明書』と書かれている。
トウガ「――俺について聞けよ」
整ノ江「（ポカン）……は？」
×　×　×
フラッシュ（回想）。バックヤード。
トウガ「インタビュー？」
羽沙美、トウガにマイクを渡し、
羽沙美「そう、製品のことだと向こうに分がある。でもこれをインタビューと思ったらどうでしょう？　試合前の会見みたいな」
トウガ「はいはいインタビュー大好物」
と、紙に『トウガ取扱説明書』と書く。
×　×　×
トウガ、マイクを持ち、答える気満々。
トウガ「ほら早く、俺様にインタビューしろ」
整ノ江「僕は洗濯機のことを知りたい――」
トウガ「――早く俺のこと聞けよぉ～！」
トウガ達の様子を見ている社員達。

四綿「これも課長達の作戦……？」
丸野「今度は何始まるんだ？」
整ノ江「……あなた、そもそもお客様相談係ですか？　っというか社会人に思えない」
トウガ「ま、選手として移籍したからな」
整ノ江「選手？」
整ノ江、紙を見る。
『史上最強の天才ボクサー』の文字。
整ノ江「ボクサー？」
トウガ「おう！　さぁ質問質問！」
説明書にボクシング１７階級の説明。
整ノ江「（食いつき）１７階級！？」
トウガ「そうだよ」
整ノ江「おたくの電動ミルも１７段階です！」
と、電動コーヒーミルの説明書を出す。
トウガ「お、おぉ……そうなんか」
整ノ江「え、何級ですか？」
トウガ「ライト級」
整ノ江「ライト級って……（と、続ける）」
羽沙美「自分で言っっといてアレだけど……、

いいのか？　これで」
と、首を傾げる。
整ノ江「次の試合、調子どうですか？」
トウガ「いいね！　全く問題ないね」
整ノ江「期待していいですか？」
トウガ「あたりめーよ。いやぁお前良いな！
どこぞのクソスポーツ記者より千倍良い！」
と――、
羽沙美「虎辻！　交代！　攻守交代！」
トウガ「おい今イイとこだぜ？」
羽沙美「虎辻調子乗らない！」
トウガ「ヤダッ！」
羽沙美「虎辻わがまま言わないッ！　お願い
だからセコンドの言うこと聞いてッ！」
トウガ「ンだよ……」
トウガ、整ノ江に、
トウガ「（しぶしぶ）じゃあ今度は……」
と、マイクを差し出す。
トウガ「お前が答えろ」
整ノ江「え？」

トウガ「俺様が聞いてやっから」
整ノ江「い、いや……僕のことは――」
トウガ「――仕事。お前の仕事は？」
整ノ江「……会社員。経理を」
トウガ「出世したいか？」
整ノ江「出世？　えっと……」
トウガ「ビッグになりたくねぇのか？」
整ノ江「え、どうだろ……」
トウガ「おいおい。じゃ女いんの？」
整ノ江「お、お、お、女？！」
トウガ「モテたいか？」
整ノ江「それは……」
トウガ「モテたくねぇのか？」
整ノ江「いやそんなことは……」
トウガ「どっちだよ？」
整ノ江「えっと……」
トウガ「答えろよ」
整ノ江「……」
トウガ「自分のことだろ？」
　トウガ、説明書を見せて、

トウガ「お前はお前をどう説明するんだ――」
整ノ江「――分からないですよ！」
　トウガと羽沙美、顔を見合わせる。
整ノ江「自分のことなんて全然。分かるのは皆が僕を嫌いなことくらい。それ以外は何も自分で説明できない。だから……」
　と、洗濯機の説明書を見て、
整ノ江「何でも説明してくれるコイツが好きで。コイツは正解がちゃんと書いてある。正解知って、付箋を剥がすと嬉しくて……」
　と、貼られた付箋に触れる。
整ノ江「でも自分の取扱説明書の付箋は全然取れない。むしろ増えるばかりで……」
　と俯き、ため息。
トウガ「意味不明なんだけど」
羽沙美「トウガさん」
整ノ江「……でしょうね」
トウガ「俺は俺んこと分かるけどね」
整ノ江「アスリートはそうでしょうよ！」
トウガ「でもだからどうした」

整ノ江「え？」
と、顔を上げる。
トウガ「あのな、分かんなくてもなんとかなるんだよ。分かんなくても、ここぞって時にパンチは出るし、パンチが来たら――」
と突然、整ノ江の鼻先へパンチ。
整ノ江、咄嗟に説明書で顔面をガード。
トウガ「ほら。な？」
整ノ江「……（説明書を見る）」
トウガ「自然とできる。そういうもんだよ」
すると、付箋がパラパラ剥がれた。
整ノ江「そっか……説明できなくて良いんだ」
と、付箋を一枚、自分で剥がす。
整ノ江「……うん」
トウガ「（羽沙美に）決まったな」
頷く羽沙美、再度電子ピアノで「カカカカーン」と鳴らすが、
トウガ「（不満げ）うーん……」
羽沙美「……？」
トウガ「なんかさぁ、そろそろ本物聞きてぇ

（整ノ江に）よな？」
整ノ江「……え？」

○泊ボクシングジム・外観（夕方）
豪快なゴングの音。

○同・中（夕方）
トウガ、リングでシャドーボクシング。
羽沙美、リングの外で見ている。
トウガ「あのガリ勉逃げやがった！」
羽沙美「そりゃそうですよ」
羽沙美、ふと見ると隅に旧型のＴＶ。
が、ブロックノイズで乱れている。
トウガ「やってみるか？　教えてやっけど」
羽沙美「結構です。私、セコンドなんで」
と、ＴＶの裏をのぞいてみたり。
トウガ「あ、そ（スピードを速める）」
と――、
泊の声「そこは選手が上がるとこだぞ」
と、泊が入ってくる。

トウガ「（黙ったままシャドーを続ける）」
泊「今のお前が遊ぶとこじゃねぇぞ」
　トウガ、シャドーをやめる。
トウガ「……俺行くわ」
　と、出ていく。
羽沙美「トウガさん？」
　羽沙美、ふと泊と目が合う。会釈。
×　　×　　×
　羽沙美と泊。
　泊もＴＶを叩いてみたり。
泊「……へぇ、アイツ今そんなことを」
羽沙美「はい、弊社の選手として」
泊「選手か。あのバカ、観察力すげぇだろ？」
羽沙美「あぁ、はい」
泊「あのバカは天才なんだ」
羽沙美「そう思います。あのバカは（笑）」
　泊と羽沙美、微笑む。
泊「相手の考えてることがすぐ分かっちまう。
　多分知りたいって欲求がデカいんだろうな」

○とある道（夕方）
一人シャドーボクシングするトウガ。
泊の声「……でもアイツは選手として、やっちゃいけねぇことをした」

○泊ボクシングジム・中（夕方）
やはり乱れがちなＴＶ。
羽沙美「やっちゃいけないこと……？」
泊「（あきらめ）さすがにかばいきれん」
と、肩にかけていたタオルを取る。
『Tomari Gym』と、書かれたタオル。
羽沙美「……」
泊「……でも、元気にやってんなら良かった。少し安心した」
羽沙美「はい」
泊「ま、あのバカをよろしく頼むよ。常識のねぇバッタみてぇなトウヘンボクだけど」
羽沙美「分かりました。……後」
泊「……？」
羽沙美「彼があんなに口が達者な理由もよく

分かりました（笑）」
泊、フッと笑って、
泊「……誰に似たかな」
相変わらず乱れがちなＴＶ。
泊、リモコンでＴＶを消す。
泊「壊れねぇＴＶはねぇのかね？」
羽沙美、思わず顔がほころぶ。
羽沙美「買い替えの際は、ぜひ伝伝電機に。
手厚いサポートお約束します」

○サポートセンター・外観

○同・バックヤード
対応件数が張り出されている。
どんどん伸びて５０件間近だ。

○同・対応窓口
顧客対応をするトウガ。
そして、他の社員もハキハキと対応。
須間瀬「返品は出来かねます、というのも―」

四綿「代わりにこちらの機能を使うことで―」
社員達の様子を満足げに見る羽沙美。

○同・バックヤード

―に来る羽沙美。と、丸野が電話中。
丸野「おかしいですよ。もう一度、ちゃんと調べてくださいね（切る）」
羽沙美、先ほどとは違う、険しい表情。
丸野「やっぱり、数字合ってるって」
羽沙美「……」

○同・外観

雲ヶ呉の声「改ざん、ですか？」

○同・バックヤード

羽沙美と雲ヶ呉。
羽沙美「こちらの集計では、エアコンの一部機種と、営業マンへのクレームが圧倒的に多い」
手元の書類にはクレーム数のグラフ。

『商品不備』『営業関連』が多い。
羽沙美「ですが本社が出した数字では、その
２つはほとんどないと」
隣のグラフを示す。
同じ２項目の件数は、わずかしかない。
雲ヶ呉「うちの集計、合ってます？」
羽沙美「何度もチェックしましたし、本社の
数字は窓口に居たらは違和感ありすぎです」
雲ヶ呉「まぁ、あんまり気にせず。ノルマも
達成できてることですし」
羽沙美「根本的なことが解決してないような
気がしてて」
雲ヶ呉、溜息をつき、
雲ヶ呉「虎辻さんを連れて来た時は、本当に
驚きました。でも今、しっかり成果を残せ
てる。それじゃいけないですか？」
羽沙美「（唖然）部長？」
雲ヶ呉「なんでそんなにマジメになっちゃた
んですか？」
羽沙美「……」

雲ヶ呉「今日の話は、宇佐林常務には、報告しないでおきますね」
羽沙美、イラ立つように席を立つ。

○同・バックヤード（夜）

『やる気なきものは去れ』の額。
それを見上げる羽沙美。
羽沙美「……」
トウガ「趣味悪りぃよなぁ、それ」
羽沙美「！」
と、トウガが入って来る。
羽沙美、そそくさと席へ戻る。
トウガ「（何かに気づき）なぁ飯、行かね？」

○ファミレス・外観

○同・店内

羽沙美とトウガ。
トウガ「男女のディナーがファミレスとは」
羽沙美「（怪訝に）十分でしょ」

と、仕事を続ける羽沙美。
トウガ「好きだねぇ」
羽沙美「（呆れつつ）最近、おかしいこと
が多いのよ。営業、商品開発、クレーム」
トウガ「俺みたいなのを雇ってる時点で、お
かしいけどな」
固い肉を力づくで切る、トウガ。
トウガ「昔よぉ、俺の癖が対戦相手に全部バ
レててな」
羽沙美「……何の話？」
トウガ「ジムの後援会の奴が、チクってやが
ったんだ。俺が気に食わないってさ」
と、切った肉を裏返す。
羽沙美「……敵は、中に居る？」
トウガ「ま、相手が変わるだけだ」
その肉を食らうトウガ。
トウガ「今まではお客様サマ。今度は会社サ
マ。俺にとっては、同じことだ」
羽沙美「トウガ……」
トウガ「営業に、商品開発？　手ごたえなさ

そうだな。もっと上はいねぇの？」
羽沙美「（苦笑）上ならいるわ。倒しがいあるわよぉ」
羽沙美も肉を口へ。

○伝伝電機組織図
カスタマサポート部、営業部、商品開発部の責任者は……宇佐林武常務だ。

○伝伝電機本社・常務室の前（夜）
宇佐林武（うさばやしたけし）（52）の声「契約数が先月以下？」

○同・中（夜）
宇佐林「絶対に認めん！」
電話中の宇佐林。顔はよく見えない。
宇佐林「クレーム？　そんなもんはな―」
手元に、カスタマーサポート部の資料。
宇佐林「―カスサポにぶん投げとけ」
資料を放り投げる。
文字が隠れて『カ・ス・サ・ポ』の字

だけが見える。

○同・外観（日替り）

高いビルを見上げるトウガと羽沙美。

トウガ、珍しくスーツ姿。

トウガ「でっけぇビルだなぁ」

羽沙美「これが、本社ってヤツよ」

○同・昇りエレベーター内

トウガ「俺のチャンピオンロードだな」

ネクタイを、ぐわっと外すトウガ。

○同・３Ｆ・エレベーター前

『チーン』とエレベーターの音。

降りてきたトウガ。ノーネクタイ。

ネクタイを拾って出てくる羽沙美。

二人、並んで歩く。

『０３』と階数表示が見える。

○同・会議室前

『商品企画部』のラベル。

○同・会議室内

トウガ、羽沙美。

向かいに、商品企画部員ＡＢ。

企画部員Ａ「製品に問題はないはずです」

企画部員Ｂ「仕様ですね」

企画部員Ａ「案内に問題があるのでは？」

企画部員Ｂ「困りますね他人のせいにして」

と、二人だけで話す。

トウガ「オイこら！」

企画部員Ａ「な、なんだ？　恫喝か？」

トウガ「……勝手に盛り上がるなよ。目の前の俺と話そうぜ」

その間に、何かを取り出す羽沙美。

×　×　×

羽沙美「13ページ目８行目」

素早く取説をめくる羽沙美。

羽沙美「そして27ページ３行目。この二か所では再熱除湿と記述されています」

慌ててページをめくる企画部員達。
汗だくだ。
トウガ「そいつはおかしいじゃねぇか。さっきのページと言ってること逆だな？」
羽沙美「以上の矛盾から、商品設計に問題があることは明らかです」
トウガ「ガード、がら空きだってよ」
企画部員ＡＢ「……」
互いをチラチラ見あう。
企画部員Ａ「わかってはいたんです！」
企画部員Ｂ「おい！」
企画部員Ａ「それを言うと常務が……」
企画部員Ｂ「やめろよ！　俺だって！」
嘆きあう二人。
トウガ「……張り合いのない相手だな」
羽沙美「序の口です」

○同・４Ｆ・エレベーター前

『チーン』と音。
『０４』と階数表示。

○同・別の会議室前

『商品開発部』のラベル。

緊張の面持ちの羽沙美。

○同・会議室内

トウガ、羽沙美入っていく。

ナーバスに室内を見回していた羽沙美、

何故かホッとする。

トウガ「（羽沙美に）緊張してんのか？」

羽沙美「いや……全然大丈夫よ」

迎え入れる商品開発部員ＡＢ。

×　×　×

製品を触る商品開発部員ＡＢ。

開発部員Ａ「あれ？　あれ？」

開発部員Ｂ「違いますって、こっちを」

トウガ「（呆れ）あのよぉ」

開発部員ＡＢ「はい？」

トウガ「自分でわからねぇ商品作るなって」

開発部員ＡＢ「……だって」

羽沙美「秒殺ＫＯ」

○同・５Ｆ・廊下

『チーン』と音。

『０５』と階数表示。

○同・また別の会議室前

『営業部』のラベル。

○同・会議室内

ふてぶてしく座る営業部員ＡＢ。

営業部員Ａ「俺達が売上つくんなきゃこの会社は成り立たないの。分かる？」

営業部員Ｂ「クレームさばくのがオタクらでしょ？」

トウガ、羽沙美をチラっと見る。

ＰＣ画面の文字を指さす羽沙美。

羽沙美「（好きにやれ）」

トウガ「（ニヤっ）」

×　×　×

営業部員Ａの頭を撫でるトウガ。

トウガ「それって、責任転嫁じゃねぇか。責

任転嫁、覚えたんだぜ俺。責任転嫁」
営業部員A「……申し訳ございません」
　隣で体育座りしてうつむく営業部員B。
トウガ「客のこと考えなさすぎだろ。観客には、欲しがってるもんをちゃんと与えねぇとな。俺の試合みたいに」
　と、ファイティングポーズ。
羽沙美「そゆこと！」

○カスタマーサポート部・雲ヶ呉の席

雲ヶ呉「僕も？」
　羽沙美とトウガ。向かいに雲ヶ呉。
羽沙美「僕も、とは？」
雲ヶ呉「他の部の奴ら蹴散らしてるらしいじゃないですか」
羽沙美「健全な話し合いですよ」
雲ヶ呉「まぁ、聞かなかったことにします―」
羽沙美「―気持ちはわかります」
雲ヶ呉「？」
羽沙美「でも、何も変えようとしないのは、

やっぱりダメだなって、今は思います」
雲ヶ呉「……」
羽沙美「不正営業、商品不備、何より大量のパワハラ。全て宇佐林常務の管轄です」
羽沙美、分厚い書類を見せ、
羽沙美「元から変えていかないと、クレームは減りません」

○同・１０Ｆ・エレベーター前

『チーン』と音。
『１０』と階数表示。

○同・廊下

並んで歩く羽沙美とトウガ。
後ろで汗を拭く雲ヶ呉。
トウガ「いやぁ、色んな奴と話してきたな」
羽沙美「そうですね」
トウガ「でもまぁ、客の方が面白れぇな」
羽沙美「本当に困ってるお客さまは沢山いる。でも、会社が変わらないと」

トウガ「変えられるだろ。俺がいる」
羽沙美「期待してますよ、チャンピオン」
拳をグッと、合わせる二人。
そして常務室の前へ。
羽沙美「いける！」
ドアを開ける羽沙美――。

○サポートセンター・バックヤード（日替り）
商品チェックに追われる須間瀬達。
机に栄養ドリンクが１本。
羽沙美の席は……空席。

○同（夜）
机に栄養ドリンクが５本。
まだ作業を続けている須間瀬。
そこにトウガ入って来る。
トウガ「おぅ」
須間瀬「……どうも」
トウガ「……おせぇんだな」
須間瀬「すいません。やっぱ……大変で」

トウガ「……そうだな」
壁に貼られた出勤表。
須間瀬「帰ってきますよね？」
一週間欠席が続いている羽沙美。
トウガ「……」

○トウガの回想～伝伝電機・常務室・前

―に、着いた三人。
羽沙美、緊張しつつノック。
が、すぐドアを開けるトウガ。
トウガ「入るぜ」
羽沙美、決意したように中へ。
迎え入れる余裕の表情の宇佐林。
と、中にもう一人。
羽沙美「！」
宇佐林「紹介しよう。私の部下の真白君だ」
現れた**真白望**（ましろのぞみ）**(27)**、一礼。
羽沙美、書類を落としかける。
支えるトウガ。
トウガ「どした？」

宇佐林「染野君とは、面識があるんだっけ？」
真白「はい。大変お世話になりました」
羽沙美「……どうして？」

○トウガの回想〜同・室内

羽沙美、トウガ、雲ヶ呉と、相対する
宇佐林、真白。
書類を飛ばし飛ばしめくる宇佐林。
羽沙美「まずは組織内のパワハラ根絶から必要かと」
トウガ「それがなくならねぇと、困った観客は減らねぇな、こりゃ」
宇佐林「そうねぇ……」
と、隣の真白を見て、
宇佐林「真白君はどう思う？」
真白「パワハラとおっしゃいますが」
真白、羽沙美を見て、
真白「ある程度の厳しい風土は必要ではないでしょうか？　なんでもパワハラと弾圧すればいいものではないでしょう」

トウガ「おぃ、アンター」
真白「―私も厳しい中で育ちましたから。
ね？　染野先輩」
羽沙美「……」
汗だくの羽沙美。

〇回想終わり～元のバックヤード
トウガと須間瀬。
トウガ「戻って来るよ」
と、別の家電を見始める。
トウガ「ニコイチだからよ」
須間瀬「？」
家電チェックを始めるトウガ。
が、膨大なチェック項目に困惑。
トウガ「えーと……」
須間瀬「（クスっと）まずは８番以降を先に
やるといいですよ」
トウガ「お、おぅ、わりぃな」
家電チェックをする二人。
エアコンのパーツを手に取るトウガ。

トウガ「……」

○トウガの回想〜伝伝電機常務室

トウガ「（羽沙美に）おい」

羽沙美「（早口に）今、その話は関係ありません。過去がどうあれ現状が」

真白「過去をなかったことにするんですか？」

羽沙美「そうじゃないけど、だからこそ変わっていかないといけないと思わないの！？」

トウガ「おい」

真白「うちはそういう会社ですよ」

羽沙美「なに言ってるの！　そんな考えだからダメなんじゃない！」

トウガ「おい！」

真白「私、ダメなんですか？」

羽沙美「（激昂）そういうことじゃないって言ってるでしょ！」

トウガ「おいって！」

ハッと、する羽沙美。

羽沙美「……」

トウガ「らしくねぇぞ」
真白「らしいですよ」
トウガ「？」
真白「先輩は、そういう人ですからね」
　ふっと笑う真白。
トウガ「（羽沙美を見る）」
羽沙美「……（うつむく）」
宇佐林「なんとまぁ……先に考えるべきは、
　染野課長の処分の方かな」

○回想終わり～ファミレス・店内

　ある席をチラチラと見る客達。
　恐る恐る何かに話しかける店員。
店員「あのー」
　そこには、微動だにしない羽沙美。
　突然跳ね起きる。
羽沙美「（寝ぼけ）はい！　はい！」
店員「あ、いや、生きているのであれば」
羽沙美「え？　え？　あ……」
　ワインのデキャンタが３本空いている。

店員「お済みの食器、失礼しますね」
と、散らかった食器をさげる店員。
羽沙美「あ、すいません……」
ケータイを見ると、大量の不在着信。
が、ケータイを閉じる羽沙美。
外を見る。太陽がまぶしい。
羽沙美「……なにやってんだ」

○伝伝電機サポートセンター・外観（日替り）

○同・応対窓口

客「なにやってんだよ！」
顧客対応する、社員達。
カウンターの内側で顧客と話すトウガ。
ふとカウンターの外を見る。
が、そこに羽沙美いない。
トウガ「……」
客「おい！　聞いてんのか！？」
トウガ「あ、お、おぅ。あのな」
しどろもどろになるトウガ。

○家電量販店・前の道

羽沙美、フラフラ歩いている。

羽沙美「あーあ……」

ふと横を見ると、家電量販店が。

伝々電機のＴＶが並んでいる。

かなり安い。

羽沙美「（ハッ）あ」

と、店内へ。

○伝伝電機サポートセンター・バックヤード

大の字に倒れるトウガ。

トウガ「あーーー」

周囲に四綿、丸野。

丸野「苦戦してましたね」

四綿「一応、納得してましたけど」

トウガ「……らしくねぇな～」

須間瀬「すいません」

と、作業中の須間瀬。

須間瀬「ボクらの作業手伝ってもらって。あ

れ、トウガさんらしくないですね（笑）」
トウガ「んなことねぇよ。俺ぁ、プラモつくりとか好きだからよ」
丸野「俺らも、手伝った方がいいかな？」
須間瀬「でも窓口も大変じゃ」
丸野「それはなぁ……」
四綿「なんか、知らないところで課長がやってくれたんだなってこと、いっぱいあるんだなぁって」
須間瀬「わかりますそれ！」
四綿「な！」
トウガ「しょーがねぇ」
丸野「え？」
トウガ「もう暫く、アイツの代わりに、らしくないことしてやっか」
バッと起き上がるトウガ。
須間瀬「トウガさん……」
が、リモコンが落ちてきて頭にゴツン。
その表紙にＴＶが点く。
トウガ「痛ってぇ」

四綿「今の、一番トウガさんらしくないよ」
丸野「世界チャンピオンなのに」
トウガ「うるへー！」
楽しそうに笑う一同。
と、須間瀬、ＴＶ画面に気づく。
須間瀬「え？」
四綿「どした？」
須間瀬「（ＴＶを指さす）」
画面には、宇佐林の姿。

○泊ボクシングジム・中

羽沙美、新しいＴＶをセッティング中。
泊、後ろで様子を見ている。
泊「いいのか？」
羽沙美「はい。ちょっと型は古いですけど」
泊「太っ腹じゃねぇか」
羽沙美「勢いでつい（笑）。……よし」
電源を入れると、きれいな映像が。
羽沙美・泊「（同時に）おー」
思わず微笑む二人。が、

羽沙美「ん？」
ニュースで宇佐林の会見映像。
羽沙美「宇佐林……！？」
宇佐林「弊社社員、虎辻トウガは現役時代に、試合中、暴力事件を起こしておりました！」
羽沙美「なに、え、なに！？」
泊、じっとＴＶを見ている。
宇佐林「しかも自分のセコンドに対して！」
当時の映像が流れる。リング上。
トウガ、泊を殴った。
泊、倒れる。
羽沙美「（ハッ）この前おっしゃってたのって……（このこと？）」
泊「ああ」
羽沙美「えー……」
宇佐林「弊社は、過去に暴力事件を起こした社員、虎辻トウガを厳重に処分致します。まずは事実関係を明らかにする為、本日、本人同席の記者会見を行います！」
羽沙美「は！？」

羽沙美、会社に電話をかける。

○伝伝電機サポートセンター・バックヤード

社内に電話がかかっている。が、誰もとらない。社員達、ＴＶに釘付け。

トウガ「あれ？　俺？」

四綿「そうですよ！」

丸野「でもさすがに、今さらすぎだろ」

トウガ「（立ち上がり）しょうがねぇなぁ」

すると須間瀬、トウガの手を掴む。

須間瀬「……行かないですよね？」

丸野「あんなの、ヒドいっすよ」

四綿「行ったら噛ませ犬です」

トウガ「噛ませ犬？」

トウガ、ニヤリ。

トウガ「上等だ。喉ぼとけ噛みついてやらぁ」

須間瀬「トウガさん！」

トウガ「行かなかったら、アイツに好き勝手言われるだけじゃねぇか」

須間瀬「でも――！」

トウガ「わりぃな！　不戦敗だけは御免だぜ」
と、出ていく。
須間瀬「そんな、二人ともいなくなったら、
どうしたらいいんですか！」

○泊ボクシングジム・中

電話をかけている羽沙美。
羽沙美「（出ず）あーもうッ！」
泊「落ち着け」
羽沙美「いやでも――」
と――、羽沙美の頭にタオルがかかる。
泊「落ち着け。セコンドが慌ててどうする」
羽沙美、タオルを取り、
羽沙美「セコンド……」
泊「試合中、セコンドがこれを投げるのって
見たことあるか？」
羽沙美「今その話は――」
泊「見たことあるか？」
羽沙美「アニメとか……降参でしたっけ？」
泊「（首を横に振り）守るんだよ。選手を」

羽沙美「……守る？」
泊、タオルを指差し、
泊「たしかに、これを投げたら試合は負けだ。でもこれで選手を守れる。選手をぜってぇに腐らせねぇ。それもセコンドの仕事だ」
羽沙美「……（タオルを見る）」
泊「あの時もそうだった。でもな、コイツを投げた後、アイツは俺を殴りやがった」
羽沙美「じゃあやっぱ……！」
宇佐林「弊社が暴力事件を許すなど――！」
泊「ちげえんだよ」

○（回想）冒頭の試合シーン

泊の声「本当はな……」
ふらふらのトウガ、今にも倒れそう。
泊、タオルを投げ、トウガの肩に。
響き渡るゴング。
泊「……（トウガを見て頷く）」
トウガ「……（悔しげに泊を見る）」
が、その時――、

相手選手「どうりで古くせえわけだ」
トウガ「あ？」
相手選手「ま、あんなジイさんについてたら、
そりゃそうなるわな（笑）」
トウガ「テメェ――！　（相手選手の方へ）」
泊「トウガ！　（と、止めに入る）」
トウガ、相手選手に殴りかかる。
が、その拳は泊に当たった。
泊、倒れる。
トウガ「……」
怒号で大混乱の試合会場。
立ち尽くすトウガ。

○（現在）泊ボクシングジム・中

羽沙美「……事故だったってこと？」
泊「ああ。でもな、試合以外で殴ろうとした
こと自体、やっちゃいけねぇことなんだよ。
だからこうなった以上、アイツは……」
と、ジム内を見回す。
羽沙美もつられて見る。

トウガの過去のトロフィー。
そしてトウガと泊が写った写真。
羽沙美「……（写真を見ている）」
照れくさそうに肩を並べる二人の写真。
すると――、
羽沙美、泊のタオルを手に取り、
羽沙美「これ、お借りしてもいいですか？」
泊「……行くのか？」
羽沙美「私はまだ彼のセコンドなので……、
付き合わされてきます」
泊「そうか。……持ってけ」
羽沙美「ありがとうございます」
泊、ＴＶを指し、
泊「手厚いサービス、助かったよ」
羽沙美「それが弊社の強みなので（笑）」
と、出ていく。

○泊ボクシングジム・前～道

タオルを手に走り出す羽沙美。

○伝伝電機・本社・外観

社員の声「大変お待たせ致しました」

○同・同・大会議室

壇上に宇佐林。会場後方には真白の姿。

社員「ただいまより、弊社・伝伝電機社員、虎辻トウガの過去の暴力事件に関しまして、臨時の記者会見を行います」

扉が開き、入場するトウガ。

カメラが向かれ、フラッシュの嵐。

トウガ「あー久しぶりだわ、この感じ」

と、マスコミの間を歩き、登壇。

トウガ「いいねビッグマッチ。最高」

宇佐林「調子ぶっこいてんのも今のうちだぞ」

トウガ「通常運転だけど」

宇佐林「せいぜいＫＯされないように足掻け」

と、マイクを押し付ける。

トウガ「（見回し）えっとー、今日はこの俺様の試合に集まってくれてどーも」

記者Ａ「……試合？」

トウガ「うん」
記者A「今日は謝罪会見の場ですよね？」
トウガ「謝罪？　誰に？」
記者A「チャンピオンへの謝罪です」
トウガ「おいおい、俺を誰だと思ってんだ」
記者A「暴力事件の張本人でしょうが！」
記者B「顧客への恫喝疑惑も出てます」
　などと、次々と質問が上がる。
トウガ「そんなブンブン群がるなよ（笑）、
　蚊かお前ら。虫除けぶっかけるぞ」
記者A「蚊とはなんですか！」
記者B「ファンもがっかりしてますよ！」
記者C「こっちは真実を知りたいんです！」
トウガ「だからよ、殴ったのはホント。でも
　わざとじゃねぇから。そんだけ。な？」
記者A「納得できるわけないでしょ！」
トウガ「うるせーな、分かんだろ」
　マスコミから、次々に怒号の声。
　少し離れて見ている宇佐林。
宇佐林「（ざまあみろ）」

すると、席を立ち、
宇佐林「（仰々しく）社員への教育が行き届いておらず申し訳ございません」
と、トウガの横へ。
記者Ａ「こんな人を雇ってるのは、伝伝電機として、どうお考えなのでしょうか？」
宇佐林「由々しきことだと、思っております」
記者Ｂ「社内に影響は？」
宇佐林「虎辻が入社したことによって、社内が殺伐としているのは事実でございます」
トウガ「おいおい（笑）、お前さぁ」
宇佐林「この『お前』呼ばわりについても、何度も注意してきたのですが、全く……」
記者Ａ「完全に人を見下してますよね」
トウガ「だってお前らバカじゃん」
記者Ａ「そういうとこですよ！」
記者Ｂ「謝罪だ謝罪！」
と、さらに荒れる会場。

○伝伝電機サポートセンター・バックヤード

ＴＶで会見を見ている部員達。
須間瀬「もうヤバいじゃないですかッ！」
丸野「火に油注ぐことばっか言うからッ！」
四綿「（スマホを見て）早速炎上してるし！」
そこに、扉が開く音。
振り返ると、羽沙美の姿。
須間瀬「課長！」
と、羽沙美の方へ。
須間瀬「トウガさんが――！」
羽沙美「――（息切れ）……オル」
須間瀬「え？」
羽沙美「タオル、他にある……？」

〇伝伝電機・本社・大会議室

怒号が飛び交っている会場。
宇佐林「――そもそもッ！　虎辻入社の経緯ですが、彼を誘った社員もまた少々乱暴な性格でございまして。そこから暴走が始まったわけであります」
トウガ「……は？」

宇佐林「実際に過去、自身の部下に対して、
パワハラを行っていたことが判明しました」
真白「……」
記者Ａ「そんな人が彼を誘ったんですか！」
記者Ｂ「一層信用が失われますよ！」
宇佐林「ですがご安心下さい。その社員に関
しても、私の方で厳重に処分致しました」
トウガ「それこそパワハラだろ――」
宇佐林「そして！　さらに社内改革を進める
べく、処分した者が率いていたカスタマー
サポート部の抜本的な人員刷新を行います」
トウガ「（ハッと）え？」
宇佐林「ここまで皆様からの信用を失ってし
まった以上、社員含め抜本的な見直しが絶
対だと考えた次第でございます。ご理解を」
と、頭を下げる。ニヤリ。
トウガ「（詰め寄り）おい宇佐林テメェッ！」
記者Ａ「カメラ！　寄れ！」
と、二人を囲むマスコミ達。
トウガ「刷新？　お前いいかげんにしろよ」

宇佐林「君はまず謝罪なさいよ」
記者Ａ「そうです、発端はあなたですよ！」
トウガ「俺のことはいいだろ別に」
記者Ｂ「良くない！」
トウガ「いいんだよ。俺はどうせ変わんねぇ。
　でも、変わろうとしてる奴の邪魔すんなよ」
宇佐林「変わろうとしてる？　誰が？」
トウガ「知ってんだろ？」
　　と、さらに詰め寄り、
トウガ「ひでぇクレーマーにもひるまないで、
　毅然と対応できるようになったヤツとか」
宇佐林「知らん」
トウガ「他の部に物申せるようになったヤツ」
宇佐林「知らんね」
トウガ「で、そんなヤツらを守ろうとして、
　必死に知恵絞って走り回ってるアイツだよ」
記者Ａ「さっきから何言ってんだよ！」
トウガ「皆変わろうとしてんのによ、一回の
　ミスで全部ダメになんのはおかしいだろ！」
宇佐林「（無視）それでは必ずや皆様に！」

トウガ「宇佐林！」
宇佐林「弊社が生まれ変わるのをご覧に――」
トウガ「――聞け！　（と掴みかかる）」
一斉にシャッター音。
宇佐林「どうりで客が黙るわけだ」
トウガ「あ？」
宇佐林「ま、あの女が上司だったら、なんでもありだわな（笑）」
×　×　×
フラッシュ（回想）。過去の試合
相手選手「ま、あんなジイさんについてたら、そりゃそうなるわな（笑）」
×　×　×
トウガ「テメェ――！」
殴りかかるトウガ。
と――、
上から何かが落ちてくる。
そして、トウガの頭にかかった。
……タオルだ。
トウガ「あ……？」

と、手に取る。
トウガ「え？」
ひらひらと宙を舞う無数のタオル。
マスコミ達「なんだ？」
トウガ「（振り返る）」
羽沙美・須間瀬・四綿・丸野を筆頭に、部員達がタオルを投げている。
トウガ「お前ら……」
羽沙美達、堂々と一列に並ぶ。
トウガ、羽沙美達の方へ。
トウガ「これ投げたら負けだろうが！」
羽沙美「セコンドの仕事は、選手をぜってぇに腐らせねぇこと」
トウガ「は……？」
羽沙美「今度は私達がリングにあがる。選手として。だからおとなしくしてて」
と、登壇する羽沙美達。
宇佐林「（羽沙美に）謹慎中だろ！」
羽沙美「（しー）」
宇佐林「は？」

羽沙美「お客様がいらしてますよ」
　と、記者達の方を向いて、
羽沙美「この度はお騒がせしてしまい、大変申し訳ありません！　カスタマーサポートセンター・課長、染野羽沙美です！」
　シャッターがさらにたかれる。
記者Ａ「じゃあ、あなたが虎辻氏を？」
羽沙美「はい、私が採用しました」
　ざわつくマスコミ達。
羽沙美「この度は皆様を不快な思いにさせてしまいました。大変申し訳ございません」
　と、頭を下げる。
羽沙美「（顔を上げ）本日は、皆さまからのご意見をしっかりお聞きすべく、この場にまいりました。よろしくお願い致します」
記者Ａ「虎辻氏を入社させたことに責任は？」
羽沙美「責任はひとえに私にあります」
記者Ｂ「知らなかったじゃすまされませんよ」
羽沙美「はい。決して彼が理由もなく暴力を奮ったという訳ではありませんが、どんな

理由であれ、やってはいけないことです」
記者Ａ「でも本人反省の色ナシですよ！」
記者Ｂ「本人変わる気あるんですか？」
記者Ｃ「伝伝電機にも悪影響ですよ」
部員達、羽沙美を見守る。
トウガも、離れて見ている。
羽沙美「たしかに……はい」
と、前を見据え、
羽沙美「残念ながら虎辻は全く変わりません」
トウガ「（苦笑い）おいおい」
羽沙美「ですが――」
羽沙美、トウガを見て、
羽沙美「周りの人を変えてくれました。本人は一ミリも変わらないまま」
トウガ「……」

○泊ボクシングジム・中

中継を見ている泊。

○伝伝電機・本社・大会議室

記者Ａ「悪影響を与えたってことですよね？」
羽沙美「ちがいます」
羽沙美、部員達を見て、
羽沙美「クレームの度を超えた要求を頻繁にしてくるお客様に、怯みっぱなしだった部員。本来なら同じ会社の仲間であるはずなのに、他の部署に何も言えずじまいだった部員。そして……」
と、前を向き直し、
羽沙美「そして、そんな部員達を目の当たりにしながら何も動こうとしなかった私です」
羽沙美、トウガを見て、
羽沙美「そんな私たちを変えてくれました。遠慮のないエラそうな態度と、なってないマナー、敬語が一つも使えないその言葉で」
トウガ「さんざんじゃねぇか（笑）」
羽沙美「それでもできたのはひとえに、虎辻本人が持っている力だと私は思っています」
記者Ａ「けど過去の罪は消えないですよ！」
羽沙美「もちろんです。ただ……、一敗した

だけで、人はもう終わりなのでしょうか？」
記者Ｂ「じゃあ、あなたはどうなんですか。あなたも過去に問題がありますよね。それを棚上げしたいだけじゃないんですか？」
少し離れて見ている宇佐林。
宇佐林「（うっすら笑みを浮かべる）」
羽沙美「はい……。今、私ができることは、当時の部下に謝ることしかできません」
記者Ａ「そうですよ、謝って下さい！」
記者Ｂ「結局自分だって人を追い詰めてたじゃないですか！」
記者Ｃ「どうなんですか！」
羽沙美「それは……（言いよどむ）」
マスコミ達、詰め寄る。
×　×　×
一方の真白、後方で様子を見ている。
トウガの声「――頼みあんだけど」
「え」と振り向く。
いつのまにか、トウガが隣に。
トウガ「アイツのために、リング上がってや

ってくれないか」
真白「は？」
トウガ「アイツの相手は、あんただろ？」
真白「……でも、マスコミはきっと私の味方ですよ？　そしたらあの人負け確定です」
トウガ「ああ。でもその方がマシ」
真白「え？」
トウガ「選手にとって、負けるよりもつれぇこと、知ってるか？」
真白「……？」
トウガ「そもそもリングに上がれねぇ事だよ」
と、シャドーの素振り。
トウガ「お前もリングに上がって、アイツにパンチぶち当ててぇだろ？」
真白「……」
×　×　×
マスコミにもみくちゃにされる羽沙美。
と――、
真白の声「（かすかに）どいて下さい」
羽沙美「（ん？）」

真白の声「（声が近く）どいて下さい！」
羽沙美「……真白？」
真白「どいて！」
　と、マスコミをかきわけ出てくる。
真白「……これは、私と染野の試合です。
　（羽沙美に）ですよね？」
羽沙美「……ええ。そうね」
　と、対峙する二人。
トウガ「（羽沙美に）思いっきり負けてこい」
　羽沙美、頷き、
羽沙美「昔私は、上司という立場を利用して、
　部下のあなたを追い詰めてしまいました。
　……本当に申し訳ありませんでした」
　と、深々と頭を下げる。
真白「遅すぎなんですよ……」
　と、息をフッと吐き、
真白「私がどんな気持ちで一緒に働いてたか
　分かります？！　憧れの人だったのに、そ
　の人に認めてもらいたかったのに、挨拶さ
　え無視される気持ち。どんな仕事も『ダメ、

やり直し』の言葉しかもらえない気持ち！
やっと終わったかと思ったら『ありがとう』
も『お疲れ様』もなく、次の仕事を押し付
けられる気持ち！　分かりますか？！」
　羽沙美、さらに深く頭を下げ、
羽沙美「つらかった？」
真白「ちがいます」
羽沙美「悲しかった？」
真白「ちがいます」
羽沙美「寂しかった？」
　真白、首を横に振る。
真白「もう、何も感じなくなるんですよ」
　羽沙美、顔を上げる。
真白「何も感じなくなる気持ち、分かります
か？」
羽沙美「……本当にごめんなさい」
真白「こんなことになるまで、その言葉が聞
けなかったの、本当残念です」
羽沙美「……でも、でもね、あれから、同じ
間違いをしないように私なりに――」

真白「よく自分で言えますね（笑）」
羽沙美「本当なの！　私は――」
真白「無様すぎますよ」
羽沙美「お願い信じて！」
真白「いい加減にして下さいッ！」
　と、羽沙美を振り払う。
真白「どう変わったっていうんですか――！」
　羽沙美、黙る。と――、
トウガ「いけ」
　と、須間瀬達の背中をバンッ！と押す。
須間瀬・丸野・四綿「え！？」
トウガ「選手交代。いけ！」
須間瀬「あー……リ、リ、リモコン！」
真白「……？」
須間瀬「……一緒に考えてくれるようになりました。……リモコンの操作方法、とか」
真白「リモコン……？」
須間瀬「知ってますか？　難しいんですよ、ウチのリモコン」
四綿「後、残業の時は必ず『お疲れ様』と」

真白「……何言ってんの？」
部員達、前へ。
丸野「今度は私達がお答えさせて頂きます。
私達、カスタマーサポート部が、真白さん
からの『お問合せ』に」
トウガ「（ニヤリ）いいじゃん」
真白「ふざけないで！」
須間瀬「ふざけてません！」
真白「……」
須間瀬「ずっと見ていました。課長が色々動
いて下さってるのを」
真白「上司の言いなりってだけでしょ？」
須間瀬「そんなことありません！」
真白「じゃあどんな風に？」
丸野「交換の女王に交換を遠慮して頂いたり」
四綿「取説の申し子に逆インタビューしたり」
須間瀬「それこそボクサーをスカウトしたり」
真白「は……？」
トウガ、須間瀬達の後ろに回り、
トウガ「いいぞ、相手混乱してる！　よし、

こっからたたみかけてけ！」
須間瀬達「シーッ！」

○泊ボクシングジム・中
　ＴＶには、騒ぐトウガの姿。
泊「まったくアイツは……（と、苦笑い）」

○伝伝電機・本社・大会議室
トウガ「いいか！　手ゆるめんじゃねぇぞ！」
須間瀬「わ、分かりましたから！」
真白「――結局！」
　須間瀬達、真白を見る。
真白「結局、仕事は楽になったんですか？
　働きやすくなったんですか？！」
須間瀬「それは……」
丸野「まぁ……」
四綿「……いえ、仕事つらいです」
　真白、フッと笑う。
トウガ「（四綿に）おい――」
四綿「明らかに度が超えたお客様もいるし、

他の部署からは煙たがられるし、自分達の
製品なのに、製品について提案もできない
雰囲気だし……楽とは絶対言えない」
真白「ほら（笑）、そうでしょ――」
四綿「でも！　それでも腐らずできるのは、
それは課長がいるからです……！」
真白「先輩が……？」
羽沙美「……」
須間瀬「お客様から理不尽なこと言われたら、
『大丈夫？』って毎回気にかけてくれます」
真白「挨拶さえしなかったのに？」
丸野「他部署にも、製品について問題提起や
改善の要望してもらえるようになりました」
真白「でもノルマ押し付けてきますよね？」
四綿「無茶なのは上と掛け合ってくれて」
真白「じゃあミスは？」
須間瀬「ミス？」
真白「ミスしたら怒り狂ってきますよね？
些細なミスでも十倍にふくらまして、これ
でもかって詰め寄って来ますよね？！」

須間瀬「もちろん、ミスしたら叱られます。
でも過剰に叱られることはありません！」
真白「ああ、じゃあ怒るのすらやめたってこ
とですか。ただの置き物になったんですか」
須間瀬「課長が一番皆の為に動いています！」
真白「……そんなはずない！」
須間瀬「そうなんです！」
真白「ありえない！」
須間瀬「変わったんですよ！！」
真白、黙る。
須間瀬「……僕も、今変わったから前はもう
関係ないとは言いません。それは事実だし、
トウガさんと同様に、理由がどうであれ、
絶対にやってはいけないことです。絶対に」
真白「じゃあ――」
須間瀬「――そんな人でも、変わったこと自
体は、評価すべきじゃないでしょうか？
製品は変わったら喜ばれるのに、人は変わ
ってもダメっていうのはおかしいと、僕は
思います」

真白「いや、でも……」
　羽沙美、真白の方へ。
羽沙美「……皆が言ってたこと、あなたにできなくて本当に後悔してる。だから――！」
　と、頭を下げる。
真白「……？」
羽沙美「今度はあなたにそれをするチャンスを下さい！　お願い！　お願いします！」
真白「……ずるいですよ」
羽沙美「お願いします……！」
　羽沙美、さらに頭を深く下げる。
トウガ「どうする、このまま決着つけるか？」
真白「……」
トウガ「まだまだ巻き返せんぞ――」
真白「――いいです、もう」
　羽沙美、顔を上げる。
真白「決着つけるのは、ここじゃないんで」
羽沙美「え……？」
真白「そのチャンス、ここじゃ使えないですよね？」

羽沙美「……（頷く）」
トウガ、ニヤリ。
トウガ「なら、もう戦う必要ねぇな」
真白「そっちがリングに上がれって（笑）」
トウガ「無駄な戦いは、数字取れねぇからな」
と、マスコミを見る。
気づけば、皆ポカンとしている。
トウガ「（宇佐林に）あと頼んだから」
宇佐林「え……？」
トウガ「じゃ、試合終了〜！」
と、会場を後にするトウガ達。
マスコミ達「何ですかこれは！」
等と、宇佐林に群がる。
右往左往する宇佐林。

○伝伝電機・ＣＭ

ＣＭ「暮らしイキイキ！　心ウキウキ！　デンデン電機〜♪　年末大大大セール！」

○ボクシングの試合会場（日替わり・夕）

激しく打ち合う選手達。
以下、リングと客席を交互に。
×　×　×
客席に羽沙美・須間瀬・丸野・四綿。
須間瀬「いけぇぇぇ！」
丸野「やっぱ迫力凄いですね」
羽沙美「ね、テレビとはちがうわね！」
四綿「で、どっちでしたっけ？　（目を細め）赤？　青？　顔が……」
羽沙美「そこじゃない、あそこ」
四綿「ん？」
と、目線をリングから少し下に向ける。
トウガの声「――バカヤロウッ！」
×　×　×
トウガ、リング下にいる。隣には泊も。
トウガ「（選手に）ビビってんじゃねぇあんなパンチ！　あんなのはただの屈伸運動だ！　手があるんだろ？　手出せよ！」

○伝伝電機本社・常務室・中（夕）

宇佐林の手には異動届。
異動先欄に『カスタマーサポート部』。
「フンッ」と書類を放り、
宇佐林「君もどうかしてるね」
視線の先には真白。
宇佐林「せっかくのポストを君は――」
真白「――いいんです」
宇佐林「……？」
真白「決着つけたいんで」
と、微笑む。

○ボクシングの試合会場（夕）

楽しそうに観戦している羽沙美。
丸野「……相変わらずだな」
四綿「選手より目立ってますね」
× × ×
トウガ「おいふざけんな！　踏ん張れ！」
相手選手のラッシュ。
トウガ「あーーークソッ！」
と、泊と目を合わせる。

トウガ・泊「（頷く）」
トウガ、タオルを投げ入れる。
ひらひらと宙を舞うタオル。
試合終了のゴング。
×　×　×
須間瀬「あー、ダメでしたね」
羽沙美「惜しかったけど」
リングアナの声「それでは見事勝利した――」
×　×　×
リングアナ「今日の試合、いかがでしたか？」
勝利選手「まぁいい感じッすね――」
トウガ「――邪魔するよ」
トウガ、乱入し、マイクを奪う。
トウガ「（勝利選手に）お前、今日の勝利は
まぐれだから。たまたまだから偶然だから」
客席からブーイング。
泊「いい加減にしろおしゃべりバカ野郎」
トウガ「ヤダ！」
泊「往生際悪いんだよ」
トウガ「うるせぇ！　せっかくボクシング界

に俺様がカムバックしたんだぞ！」
敗北選手「まぁまぁ、落ち着いて」
トウガ・泊「オマエが言うな！」
×　　×　　×
丸野・四綿「あーあーあー」
須間瀬「変わらないですね（笑）」
羽沙美「（微笑み）それが、虎辻トウガ」

○同・会場入口（夜）

会場を後にする観客達。
そこに須間瀬達も。会場を後にする。
少し遅れて羽沙美も。
そこに、ポツポツと雨が。
羽沙美「（マジか）えー」
と――、頭にタオルがかかる。
振り向くと、そこにトウガ。
トウガ「どうよ、俺のセコンドぶりは」
羽沙美「どうって（笑）、相変わら……」
と、言いかけるも、
羽沙美「ま、０．５ミリ位は。前より」

トウガ「おお。大成長じゃねぇか」
羽沙美、思わず微笑む。
トウガ「そっちの試合は？」
羽沙美「うん、もうすぐゴングがなるはず」
トウガ「良い試合にしろよ」
羽沙美「（頷く）」
雨が強くなってきた。
トウガ「（タオルを指し）使えよ」
羽沙美「ああ、ありがとう」
トウガ「ちゃんと髪乾かせよ。ドライヤーで」
羽沙美「分かった（笑）。……じゃ」
トウガ「おう」
羽沙美、タオルを傘代わりに走り出す。
そして、羽沙美を見守るトウガ。